



TITLE:

雑報

AUTHOR(S):

CITATION:

雑報. 地球 1930, 13(6): 469-470

ISSUE DATE:

1930-06-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/183763>

RIGHT:

することが出来る。天保二年版は美はしいカツパ摺の標本として、鮮明な原色玻璃版として口繪となつてゐるのも親切な試である。

讀者は本書によつて古い平安京がどうであつて、その後京白川といった時代の様子應仁大亂の後の京都、さては秀吉のつくつたお土居と今の京都との關係、もしくは最近に大京都となつた新區域と古京との關係等を理解されると同時に、源氏物語や平家を読む時の參考を隨所に求められる。

土御門内裏の最初の大き、その後の京都御所の發展なども之を明にすることが出来て、一讀京都通になつたと考へられるであらう。古い都であるから後世秀吉といへども手をつけなかつた部分があつて、それが現存して京都の中樞となつてゐることを證明したときは、都市計畫家に對する參考ともなりうる。従つて單に人文地理學者のみの參考書ではないと思ふ敢て江湖に一本をすゝめる。(一)

雜報

○英國造船業の昨今

英國の造船業は世界主要諸國の間にありて今猶絕對的優越の地位を保ち其一年の建造噸數は世界總噸數の殆ど半を占めつゝあれども、戰爭直後の大量氣一過して以來其建造噸數は著しき減退を示めし、一九二三年の三百七十萬噸を絶頂として急轉直下するに至り、最近やゝ

復活したるも猶百五十萬噸の程度にすぎず、隨て全盛時代に擴張した船臺の大部分は殆ど不用に歸しつゝあり、その原因は主として海運の世界的不振にあるは勿論なるも一方軍備縮少の影響もきつい、戰前軍艦類は二割五分を造つたのに今は激減して一割四分となつてゐる、將來も其復舊は覺えない、加ふるに近時海運界は大型船建造の趨勢益々顯著となり、戰前五百隻で百五十萬噸のものや三百五十隻を以て僅に同じ噸數に餘る、かうした事情で不用船臺も増加したので、將來近く恢復の見込みないから、今回主要造船會社共同して *London Shipbuilders Security, Ltd* なる會社を設立した、この新組織は造船業を集中する共同計畫であつて、時代後れの造船所を買收閉鎖するのを目的とし過剩建造力の除去と、生産の集中とを謀るにある。蓋し英國造船業は過去二年間徐々に世界造船界に於ける地位を鞏固にしてきたとはいへ、この際合理的に管理しかへることは望ましい。

大戰中政府の強制により、潛艇戰の爲に生じた商船や軍艦の急速の補充をはかつたが、今後さうしたことは當分あり得ない、幸に斯業に於て世界的に第一位の手腕をもつために、外國からの注文も減退はしなかつたから、一九二八年一九二九年二度にわたつて労働者の賃銀を増加することを得たけれども今日に於て新しい經營に移ることは急務であり、労働者と雖もよくその必要を理解した、勿論この爲めに一時失業者の増加を見ることあるべきも、斯業の基礎が確立したら却つて地が固まつて労働者の方も都合がよくなるといふこと

であつて、各新聞社なども大に之を獎勵しタイムスなどもその成功を祝してゐるし、労働組合の態度も亦造船業一般の利益の爲なりと思惟すると言明した。予はかうした當然の失業者を相當に救済して着々と時代に合致して進んでゆく英國人の偉大さに敬服して、一方紡紡などの爭議の惡化を悲觀せざるを得ない。

○ボルネオの石油

目下石油界の注意を喚起してゐる蘭領ボルネオ東海岸地方には、油田六十萬ヘクタールがある、今後五年の後は現在に倍加する石油の産出を見込まれ、一九二九年二月には米國の大會社たるガルフオイル會社及スタンダードオイル會社は前後して調査隊を派遣し、日本も亦二月にウーストボルネオミジと提携しサンクリランを中心に調査に着手し遂に石油會社を立てた、サンクリランは *Sungai Lingsat* であつて赤道の北約一度を隔てた東岸のマシカリハット岬半島の南側に位した海港の一である。尙同年七月には米國スタンダード系の二回の調査がこの方面に試みられた、目下其の手でクティ (*Kuti*) で試験してゐる、これはサンクリランの北方の斜面である、

かくてバリクババン、サンガサンガ、タラカン等の石油地と共にこの方面の企業はやがて稠密な瓜哇の人口をこの方面に吸収するであらう。

○ヒリツピンのグアノ業

比律賓群島には諸方に廣漠なグアノの堆積があつて、企業家をまつてゐる、ことに蝙蝠

グアノ のごとき未着手のものが群島内に多いといふ。

グアノは海岸島嶼洞窟内等に棲息する海鳥及蝙蝠等の排泄物から成立し、そのまゝでよき肥料となる。比島に多いのは洞窟内に潜存する蝙蝠の糞である。其色は褐色又は灰色を帯び、形狀は土砂と區別しがたい。窒素含有量は九%、磷酸は二五%にも達する、但し其産地によつて成分は幾分の相違がある。比島でも農業上之が有效といふことがわかつて、近頃マニラ市に三軒の肥料會社が出来た、大部分は國內消費で、甘蔗栽培に用ひられる。しかし需要が常に多いわけでないからグアノの探掘は絶えず進行してはゐない。しかも近年米國や獨逸製の混合肥料が輸入されて競争するから猶更其生産が減ずる、しかし科學局的報告によれば、グアノの内地肥料は輸入肥料と殆ど同一の效果があるといふことである。但し探掘は比島人及米人に限られてゐるが、米國は肥料の一大輸入國であつて一九二七年には九十萬弗の肥料を消費したけれども比島からは些も輸入されてゐない、故に近き將來に米國への輸入が發達するであらう、日本も亦グアノの輸入國であつて近頃ある會社がモンタルバン (リサール州) から探掘したグアノを受取つて分析したといふ。いづれは大きい取引を行うことであらう。支那も亦近頃肥料を用ひるやうになつたから比島のグアノの探掘は近き將來に立派な工業となるであらう